

谷川俊太郎



日々の地図

日々の地図

谷川俊太郎

ひびのちず
日々の地図

一九八二年十一月十五日 第一刷発行
一九八八年三月十五日 第一〇刷発行

著者 谷川俊太郎
たにがわしゅんたろう

発行者 堀内末男

編集 株式会社 創美社

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五—十
〇三—三三〇—六一〇〇 (出版部)
電話 〇三—三三〇—六一七一 (販売部)
〇三—三三〇—六〇八〇 (製作課)

定価 九八〇円

検印廃止

ISBN4-08-772410-7 C0092

© Shuntarō Tanikawa 1982

Printed in Japan

落丁・乱丁の本が万一ございましたら
小社製作課宛にお送りください。送料
は小社負担でお取り替えいたします。

日
々
の
地
図
目
次

神田讃歌 7

新宿哀歌 10

遠近法 14

都市 20

ほほえみ 22

八・一五 24

見知らぬふるさと 26

背中 28

泣く 30

間違い 32

後姿 34

道 36

就寝	70	
歯痛	68	
私的な equivalent		66
ルフラン	64	
回復期	60	
木綿私記	56	
籐椅子	54	
朝	52	
見るために		46
道化	44	
その人	43	
からだ	41	
おとこたち		39

無言歌 72

もうひとりの人 76

砂に象る 80

絵のない絵葉書 83

ヒグレオシミつつ 86

ジョン・レノンへの悲歌 93

あとがき 103

初出一覧 105

カバー・本文写真 谷川俊太郎

装幀・写真レイアウト 菊地信義

日
々
の
地
図

神田讃歌

その街で靴を買ったことがあつて

その靴でサン・フランシスコの坂を上った

その街で栗の菓子を食べたことがあつて

その香りが秋のくるたびによみがえる

ただ一冊の書物をもとめて

長い午後を夕暮へと歩む街

行き交う無数のひとびとの暮らしを

一行の真理とひきかえにしようと夢見る街

その街で弁護士志望の娘と会つて

その娘はいつのまにか詩を書き始めていた

その街で無精ひげをはやした編集者と話して

その男の名は伝説になった

産声に始まって念仏に終る声の流れ
白い畠に黒い種子を播く活字の列
私たちの豊かな言葉の春夏秋冬が
この街の季節をつくっている

その街で学生たちの泣くのを見た
あの涙はどこへ消え失せたのだろう
その街で時代の歌を聞いた
その旋律は今も路地にただよいつづける

声高に批判しうつむいて眩き
無表情に計量し怒りつつ語呂をあわせ
この街にかくされている
ありとある思いの重さ

たとえ川は忘れられても

この街に人間の河は絶えない

たとえ祭はすたれようと

この街で人は人に出会いつづける

新宿哀歌

まっすぐ歩くと

すぐ青空につきあたってしまうから

あの角を曲ろう　そして

ダウン・タウンへまぎれこむんだ

ほんとうの花はただで

土からひっこ抜くことができるけれど

造花はお金で買わなきゃならない

それが哀しいのか楽しいのかさえ

分らなくなったら

なんでもいい

知っている歌をくちささむんだ

一億年前にはここにも

象がいたかもしれないのだし

一億年後にはまた

象がもどつてきてるかもしれない

そんなことを考えると

なんだか美しすぎるような気がする

あの窓のひとつにあなたがいるなんて

硝子の扉の前に立てば硝子の扉は

音もなく平等にみんなを呑みこむ

もう「開け胡麻」と

呪文をとнаえることもないのだ

なにもかも透き通つてしまうから

せめて残された欲望にむかつて

あの角を曲ろう

*

さつき王女が通りすぎた片隅で

いま家出娘が途方にくれている

きみ 退屈の値段を知つてるかい

退屈はダイヤモンド一個で買えるよ

*

どの店にも名前がある

人のひとりひとりに名前があるように
それなのに吐息には名前がない

地下を流れるよごれて泡立つ水にも

*

きみは言うだろう

わたしはバーボンの味を知つてると
一文なしで歩くのがしゃくなときと

一文なしで歩くのが嬉しいときと
そのちがいだって知つていると

そう きみは言うだろう

わたしは生きていると

トンボの眼玉であたりを見まわし

蝶の触角でステンレス・スチールと

びろうどの肌ざわりを楽しんで

きみは笑うだろう

昔ながらのスパイク・ジョーンズに

きみはとまどうだろう

もう死んでしまった

ジェームス・デインに

そしてきみは泣くだろう

どんな理由もみつけれず

きみのダウン・タウンで

遠 近 法

へぼくはどうしてここにいるのへ

そうきみはたずねた

冬休みのデパート

おもちゃ売場へとのぼってゆく

エスカレーターの上

忘れものでも思いだしたような

そんな調子で

ふくみ笑い内しよ話

かん高い泣きごえ

あまったるい音楽

へどうしてって

おもちゃを買いにきたんじゃないか

あんなにきみのほしがっていた